共立研究

東京基督教大学 共立基督教研究所
〒270-1347
千葉県印西市内野3丁目301-5-3
TEL. 0476 (46) 1137
FAX. 0476 (46) 1140

vol.Ⅳ　No.2　1999年1月6日

特集　変貌する世俗社会と教会

世紀末の今日、人々の意識や生活スタイルは急速に変わりつつある。欧米ではポストモダンの時代と言われ、価値基準が著しく相対化し、世俗化が一層進行している。欧米のポストモダンの潮流について、このたび「世界宣教講座」（東京キリスト教学園主催）の講師として来日したオランダのサンダー・フリフューン博士（Dr. Sander Griffioen）を迎え、1998年10月12日に講演会を行った（於お茶の水クリスチャン・センター）。講演の後、「21世紀日本の宣教スピリット」と題して、稲垣久和（東京基督教大学教授）、湊晶子（同）、松元保羅（福音キリスト教会連合・松見ヶ丘キリスト教会牧師）の三氏によるパネルディスカッションがもたれた。講師のフリフューン博士はアムステルダム自由大学の社会哲学教授で国際キリスト教哲学協会会長、多数の著書がある。本号はその講演会とパネルディスカッションの全記録を掲載する。

1-5頁は著作権許諾の関係で非公開としています。
宜しくご了承ください。

目　次

特集　変貌する世俗社会と教会
講演　私の名はレギオン
—ポストモダン文化入門—
サンダー・フリフューン
パネルディスカッション
21世紀日本の宣教スピリット
稲垣久和・湊　晶子・松元保羅

パネルディスカッション：21世紀日本の宣教スピリット

日本社会はポスト近代（モダン）かプレ近代（モダン）か

稲垣：さっそく二部に移らせていただきます。一人15分、まず発題をいたしまして、そしてその後少し、そのことについてディスカッションをし、またフロアーのほうに議論を広げていく、ということでやらせていただきます。で、まず最初に私ですが、今のポストモダニズムのいわば西洋における状況ということをうけて、それを復習しつつじゃあ日本ではどうなのか、ということを考えたいと思います。レジメのようなものを出しました。ポストモダニズムということで今、サンダー・フリフューン先生からお話を頂きました。最初に、70年代以降の時代風潮と言うことで、そのことを意味づけます。そしてそのポストモダニズム、特に建築の話とか映画の話とか、ありましたけども、まあ、哲学ということに焦点を合わせますと、70年代以降強くなってきた現象だなあと。それは当然意味があるわけでして、それまでのモダニズム、近代主義に対する一つの批判と言う形で、ポストモダニズムが出てきたわけです。いくつかの特徴をレジメに書きました。哲学においての主観、客観の区別、これは、17世紀のルネ・デカルトにはじまる考え方ですね。主観の“観”の字は「見る」という意味ですから先ほどの先生のお話の中に、その「視点」、「見る」ということが強調されていましたけども、デカルト以降、人間がですね、「我思うゆえに我あり」という命題を持つことによって、その「自分（主観）」が外を見るという形で、「客観（外の世界）」と、「自分（主観）」との間に、二分的な状況が生じてきた。それがですね、いろいろな弊害をもたらす、たとえば主観、客観の分離ということで、物だけじゃなくて人間をも客観視するという状況。医学の領域で、盛んに今言われていますけど、物としての人間を扱うだけの医学、それで一体良いのだろうか。相手の患者さんは生きている。患者さんも主観ですよね。それでお医者さんも主観。ですから相手を客観という風にして、物としてみることはできない。そこで色々の医療倫理と言うことで、今出てきているわけです。それがですね先ほどのお話ですと、そういうことへの批判として私の見る視点を相手に押し付けていく、そういうアプローチではなくていろんな見方がある、視点中心主義というものが70年代以降特に強くなってきて、いろんな見方があるということをまず承認しよう。しかしそのことは今度逆に自分も外からいろんな見方で見られるという形で自分に跳ね返ってきて、そして一体自分とは、何なんだろう。その状況状況、環境環境ごとに自分をくるくる変えていっちゃう、そういう自分、多重の自己というものにならざるを得ない、そんなお話がありました。ですから自分としてのアイデンティティがそこでなくなってしまう、自分を失うという状況が起こってくる。クリスティーバの小説を引用されまして、自分の中にある他者性というようなことも言われている。自分が何であるかさっぱりわからなくなってしまう、それを私は、主観、客観の区別がわからなくなってくるということで、「主観・客観の区別の廃棄」と書きました。二番目に「言説の多元性」、それと関係していることですけども、真理というのは一つじゃない、いろんな多元的な真理性がある、こんなことですね。建築においてガラスというものが使われるようになったということを言われまして、そしていろんな形で映り方が移っていくことがもう既に建物の構造である、多元的にですね、物が存在するということを承認していく。逆にこれはですね、たとえば小説なんかを読んでも、小説を書いた作家の意図とか、そういう物と無関係に読者がその小説を自由に読み込み、いろんな読みかたがそこに出てくる。そういう意味での多元性すらいわれてきた解釈における多元性。こんな物がもし聖書解釈に応用されるとまたこれは大変な問題がでてくる、そのことはわかるわけですよね。そしてその上に「形而上学への反対」と書きましたけど、これは結局大きな物語と言いますかね、西洋哲学のプラトンやアリストテレス時代の形而上学とか、そういうことはもう成り立たない、その場面その場面、その文化その文化で真理性と言うものは違うから、全体を統一する包括的な形而上学、世界を統一する包括的な形而上学、「もうそんなものは存在しないよ」

そういう状況ですね。形而上学への反対。それと関係して四番目に「プラグマティズム化」と書きました。これは当然、そういう原理原則を与えるその形而上学的な真理というものがもうないよという状況になってしまえば、当然のこととしてプラグマティズム化する。つまり実利主義といいますかね、実用主義といいますかね、自分に都合良いものだけを使っていく、それが真理であろうがなかろうがかまわない、そういうプラグマティックな物の考え方が哲学の中に入ってきてそれが主流になる。というようなことで、四つぐらいポストモダン哲学の状況をあげました。これがポストモダンにおける西洋哲学の現状なんですけど、日本についてこれから私たちが議論していこうとするときにですね、実はこれは大変大きな問題なんです。

それはどうしてかと言いますと、現代の日本社会を眺めます。そしてわれわれは福音を伝えるときに、その現代の日本社会の状況をよく理解した上で伝えなければいけない、これは当然ですよね。その現代の日本社会の一つの特徴、これは言うまでもなく先進国、ある意味では超先進国、ということでしょう。高度なテクノロジーが発達しております。ホンダ、カワサキ、ニッサン、トヨタ、とか何とか、そういった言葉をよく外国に行って聞くわけですけどそれはなんですか？もちろん日本の車。日本というとですね、トヨタ、カワサキ、ニッサン、何とか、そういった言葉がすぐ出てくる。高度なテクノロジーを誇る国、これは世界中にある意味では容認されている。最近でしたら、コンピューターもそうですね。情報化、これも日本は非常に進んでいる。いわばこれは近代の側面です。モダニティーの側面です。もう一つですね。これだけで日本を見たらこれは大間違いです。もう一つ別の面がある。それは何かといえば日本の伝統、いわゆる伝統というものの執拗な強さ、これを特にこのポストモダンの現代に強く感じます。それで、先ほどあげました、欧米におけるポストモダン哲学の特徴、よくよく眺めてみますと、私の理解では、これは日本の伝統思想の特徴そのままだということなんですね。ですから欧米のポストモダンの影響はむしろ日本の伝統、すなわちいわゆる明治以降の近代日本の前ですね、プレモダンです。その伝統的精神を活性化させてるじゃないか。一時はやりましたよね。江戸時代は面白い。江戸文化美術館とかそういうものもできた。明治以前、近代以前の日本。なかなか良いものがたくさんある。そういう風なことなんですね。でも安易にこれに乗ることはできない。もちろん近代の色々な負の面を私たちは理解するけれど、かといっていきなり日本の伝統に、ぱっ、とこう飛び乗って日本的な意味のプレモダン主義者と言いますか、ポストモダン主義者と言いますか、そういう人達に迎合することはできないと思います。だって早い話が江戸時代に戻ると言ったって、よくよく我々クリスチャンの立場から考えてみると、江戸時代なんてひどい時代でしたよね。我々は存在できなかったわけです。つまり見つけられるや否や、すぐ首をちょん切られた、キリシタン禁制の時代でありましたから。

ですからそういう強い緊張関係に現代日本が置かれているんじゃないか。一方ではものすごく超モダン、テクノロジーと情報化の日本、一方では、非常に伝統というものの復興を執拗に感じてくる、そういう時代。1990年に天皇の代替わりの大嘗祭、それが国費を何億円もかけてやるという風な状況があった。あれもそういう一つの伝統復興の兆しだろうと思います。フランシス・シェーファーの『それでは如何に生きるべきか』という本の中に最終章ですけども、そこに二つのことがありました。それを今ここで出して考えてみたい。ひとつは、「若者文化に広がる倦怠感」。私はニヒリズムという言葉で呼びたいんですけど、それをシェーファーの本は最後に挙げていましたね、学園紛争。闘争の後の若者は、三無主義、四無主義になってしまった。アパシー、倦怠感が学園に広がっていく、若者全体にそういう状況が出てきた。これはですね、そのまま日本の今、当てはまっていると思います。今の日本の若者の、わたしはニヒリズムという言葉で呼びましたけれども、二つに分けて、宗教的ニヒリズムと、それから世俗的ニヒリズムというものが蔓延しているなという風に思います。宗教的ニヒリズム、これはあのオウム

なんかに代表される、カルトの隆盛ですよね。それから世俗的ニヒリズム、これはいわゆる、自分だけの興味につっ走っていく、オタク。こんな風に言えるんじゃないかなと思います。それからシェーファーの本が最終章で、予言的にですね、言ってたことは、操作と新しいエリートの出現ということなんですけれども、これもまた、ある意味では今の日本に非常によく当てはまっている。最近の、日本のテクノクラート、官僚ですね、ビューロクラシィのシステムに対する批判がすごくいろんなところで出てきていますけれども、そういういわば説明する責任、アカウンタビリティを果たさない管理者達のグループが支配者として、日本の上に存在している。一方で民衆はですね、それに対して何か物申すということをしないで、「シカタガナイ」とあきらめてしまう。7月の参院議員選挙では、ちょっと前よりは投票率あがったみたいだけれども、依然として政治への関心はほとんどない。という風な状況で、大衆は自ら責任を持って社会を作っていこう、この自覚に目覚めたいわばシチズンですね、市民として自覚して、自分達の手で自由を作り上げていくんだ、そういう要素がほとんど見られない状況ではないだろうか、と思うわけです。

それで、今後の宣教課題として最後に二つのことをあげたいと思います。ひとつは、今言いましたように「近代」と「伝統」の強い二元的分離という日本人の文化構造であり、精神構造があるということ。このポラリゼーション、分極化というものを私たちはよく理解しなきゃいけないですね。それを理解した上で宣教することが必要だと思います。いわゆるコンテクチュアリゼーション、宣教学で最近いわれるこのことは、この片方の「伝統」、たとえば祖先崇拝とか、そういうようなことだけを取り上げて、それにあわせて伝道すれば良いということ。それもまあ、一つですけれども、実はもう少しそういう面だけではなくて、非常に超近代的な日本文化の側面というのがありますから、それも多くの若者達のライフスタイルを捉えている側面ですので、その近代的な側面を無視して、やっぱり伝道はできない。問題は、この「近代」と「伝統」が、非常にハーモニーがない形で、ぶつかり合ってる、それが今の日本の状況ではないか。キリスト教世界観という言葉を先ほど、フリフューン先生が言われたけど、むしろ私たちクリスチャンはキリスト教の世界観を持つということは、こういう分裂したですね、精神状況、近代と伝統の分裂した、分極化した精神状況ではない、もっとハーモニアス、調和のあるそういう人格を一人一人が持ち、かつ、文化を形成していく、そういうことをキリスト者の側から提案していかなければいけない。これは大きな戦いとなる。総じて福音を全人格的にとらえる。救済って何だろう、まあ、福音派の人たちはよく「救われる」という言葉を口にするんですけれども、救われるとはどういうことですか？　少なくとも、聖書が創世記の最初から黙示録まで述べているメッセージというのは、やっぱり全人格的な救済ということだと思います。これを確認して、人々に本当に神にのみ頼るそういう自立した人格的な個というものを福音から提示していく。また福音だけがそれを提示できると思いますから、そういうことを私たちが宣教というときにですね、同時に課題として出していって、そうして人々に伝えていく、そういう風な宣教というものが21世紀に必要になるんじゃないか。そうじゃないと非常に今の時代、断片的に福音を伝えるというようなことでは、とてもカルトのようなパワーにですね、かなわない。もっとホーリスティック（全体論的）な真理性というものが聖書にある。それをキリスト教の世界観という風なことで一口に言っても良いかもしれませんが、日本人の、今、という状況に合わせてそういうものを伝えていけたら、という風に思います。以上です。

欧米と日本、女性と人格形成

湊：難しいテーマを頂戴いたしておりまして、欧米のポストモダニズムと日本の家庭、と言いますと広くなりますので、女性、フェミニズムという形で、今のフリフューン先生のお話を伺って、そして稲垣先生の15分のお話を伺って、その上に私の考えておりますことを積み上げさせていただきたいと思います。フリフューン先生はオランダの神学者であり、哲学者であられますから、やはり近代以前、「自己、我、私」の理念、すなわち統一的な概念、統一性の

強調に対してポストモダンとして多様性を包括している、多重の自己、多様性ということでお話を始められました。そういうお話を伺いながら、そのお話が展開していく中で、自分達クリスチャンだけがすべてであって、そしてノンクリスチャンが、他者としてなかなか認められなかったという、こういうキリスト教国ヨーロッパにおける概念意識というのですか、その点を強く私は感じました。私のレジメを見ていただきますと、まず第一のところに、「キリスト教史2000年と日本キリスト教史140年におけるポストモダニズムの意味」というようなことで書き始めさせていただきました。これは私は、このようなことが公演の中に、入るのではないかなということを予想して、一言ここに書きました。これをお読みいただきたいと思いますが、最後のほうに、ＡＤ2000年を迎えようとしている欧米ヨーロッパキリスト教史におけるポストモダニズムの把握、いわゆる歴史の中に、2000年の歴史を持っておりますから、その中における統一性。そしてキリスト教国オランダ、すなわちプロテスタントが強いですから、その中における概念構成というのがあります。それに対して、自由主義神学等における、その影響を受けてポストモダニズムというのが出てきているわけですが、私たちの国にとってはちょうどその波が本当に荒れ狂っているときに、日本においてはやっと1859年に、プロテスタントが伝えられて来たのです。19世紀後半ですね、それから20世紀前半にかけての要するにキリスト教の概念が、いかに文化の中に定着していくか、また展開していくかという戦いをやってきたわけです。すなわち明治初期のキリスト教のあの姿であります。１パーセントまで今伸びてると言うことは、私は非常に大きな成果であるとむしろ思っております。それと同時に、フリフューン先生のお話での、質問者の方に対する回答として、お話がございましたけれども、イスラム教の方からの姿勢ですね。

私は女性学の専門家ではありません。キリスト教史の教師でございますが、いろいろ本を読んでいきます中にやはり西欧の先生でポール・トゥルニエという人がいらっしゃいますが、もうお亡くなりになられましたが、「今こそ女の出番」と言う章を『女であること』という本の中に書かれました。いかに女性が人への関心を持っており、抽象的考えよりも、個人的体験に興味を持っているかを発見する中で、われわれ男性がいかに人への関心に欠けているかということもよく分かった。それと同時に、また何故われわれの西洋文明が、過去4世紀にわたって女性を社会生活から締め出し、その影響力を封じたために、人よりも物の方に傾斜していったかも分かってきたのである。これは私が言ったのではなく、男性のトゥルニエ先生がおっしゃられたのです。本当にそうだと思いますね。そういう中でたくさんの女性論者が出てまいりました。このことについて話をさせていただきますと、ほぼ一時間たっぷり喜んでしゃべってしまいますので、お話をしませんけれども、シドニー・カラハンであるとかゴスマンであるとか、フェミニズムとキリスト教、あるいはシドニー・カラハンは女性の生き方という、こういう非常に深い哲学、女性の聖書学的なそれからキリスト教との関係からの分析ということがヨーロッパでは展開されてまいりましたが、アメリカのほうではどちらかといいますと、聖書に見る女性差別と解放という、こういう書物がたくさん出てきます。たとえばフィオレンツァによる『彼女を記念して』とか、色々な本が出てまいります。そういう中で私が今日お話をさせていただきたいことは、レジメの３に書かせて頂いたことでございます。この現代の世俗社会の中での最大の忘れ物は、自分と他者であると書きました。主に愛されて自己確立されない限り、他者を愛する自己は確立されないと。主に愛されて自己確立する。もし多重人格であり、今日お話の前半にありましたが、あるいは、自己破壊されていく中では自己確立はできないのであって、まさに主に愛されて自己確立されない限り、ダニエルのような状況に一人で立ち、まさにルターのように、「我ここにあり、他はなしあたわず」というこういう確固とした自己確立はできない。垂直的な神との関係における自己確立でなければならない。それは神学的自己形成論なくして、この変貌する世俗社会を救うことはできないと。まさに変貌する世

俗社会を救うことができるのは、垂直的な神との我の自己確立ができた自己であって一つの自己の中に多元的に自己が存在するその中に他者を受け入れるのではなくて、その自己が確立されて初めて水平的な自己確立と同時に、他者を受容する自己が存在することができるという、これが聖書の教えであり、また稲垣先生が今最後におっしゃられた、個の確立の内容であると思います。

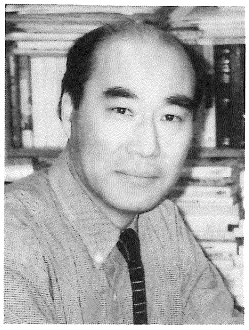
それで欧米が啓蒙思想であるとかそれから合理主義の影響の下に、モダニズムの神学に傾倒していった時代は、日本では先ほど申し上げましたように、数多くのミッションスクールが建てられていった時代であります。プロテスタントの人間形成論から日本の文化は形成されてきたと私は思っております。たとえ1パーセントであっても、日本の近代化というのは、プロテスタント人間形成論なくして語ることはできません。しかも、そのプロテスタント人間形成の人間は、女子教育の形成であったと言うことも、私は見逃すことができないと思います。しかも、この近代日本形成期を支えた女性論と言うのは、抑圧からの解放論ではない。いわゆる抑圧というのは人種解放、この黒人が白人からの抑圧から解放されるいわゆるシヴィルライトムーブメントのあの時代の抑圧でありますが、それと性の解放が同じレベルで取り扱われたのが米国におけるフェミニズムであり、それが極端な所に行ってしまった原因であると私は思っております。こういった抑圧からの解放論であるよりは、むしろ、日本の人間形成論というのは、自立とか、本当の独り立ちっていうのは私の得意な言葉なのですが、この本当の独り立ち、この問題が日本では解放論よりも重要な問題として取り扱われているんですね。すなわち神様との人格的交わりが構築される真の人格としての人間形成論です。これであったことに注目したい。また、それをしっかりと今西洋でポストモダニズムの時代と言われている時に、日本がプレモダンであるか、ポストであるか、というこの議論もまた大事でありますが、その中にあって今私たちは明治以降に築きあげてきたものが頓挫している中で、いわゆるミッションスクールにおいても、一般社会においても、真の人格論とは一体何かということが明確になってないんですね。そういう中でそれを構築できるのは教会であり、私たち一人一人のクリスチャンであると思うのです。同時に、日本の社会に対してだけでなく、統一性が破壊されてしまっている西欧の社会に、私たちが今これを輸出していくといいましょうか、その日本のほんの140年の時代に起きてきたこの人格としての人間形成論がいかに、ポストモダンの西欧社会において大事であるかもう一度、再構築しなければならない時が来ていることを私たちのほうから輸出していく、そこに日本のキリスト教の今の重大な責任があると私は、少しオーバーかもしれませんが思っております。日本のキリスト者女性達にとって、日本的イエ意識、これはもう時間がないから止めますが、女性達が戦っていかなければならない意識です。日本には西欧のキリスト教会が理解できないテーマ・意識構造がたくさんあります。ですから西欧からの宣教学だけに頼るのではなく、今お話を伺った宣教学の深い内容を身に受けて、では日本では私たちは何をなすべきか、ということを構築して行く必要を強く感じます。異教の地日本でいかに人格形成を努力してきたかを、キリスト教西欧の崩壊といわれるポストモダンの時代に、発信する責任を私は覚えます。そして西欧と日本、アジアのキリスト者が地域と文化と性を超えて、協調したいんです。性を超えて、あの地中海世界で民族を超えて、そして階級を超えて、われらキリストにありて一人の人であると、あのガラテヤ書の3章28節でパウロが勇気を持って発信したこのメッセージは今、私たちのこの20世紀、そして21世紀に向けて、キリスト教西洋ではなくて、キリスト教世界を作り上げていく上で、非常に重大なメッセージであると思います。

教会現場で起こっていること

松元：松元保羅でございます。なんか非常に場違いな感じがしておりまして、いつも教会で日曜日礼拝のメッセージをしているような一教会の一牧師でありますが、こういうところに引っ張り出されまして、だいぶ場違いな感じがしてます。教会にいる自分とこういうステージに立ってしゃべっている自分と同じ自分だろうかと、私の中では統一が取れているだろうか、多重な人格を持った自分がここにいるんじ

ゃないか（笑）。日本にはその場の論理っていうのがありまして、その場その場でそれなりに振る舞うと言う得意技がありますので一貫性がないままでなにかしゃべっている感じがしないでもないんですけれども、この世俗化社会、そしてポストモダンと言われるこういう時代の中で、教会に仕える一牧師として率直に思っていることは、教会は紛れもなくやはり時代の波に洗われているな、という感じです。世俗化がどんどん外的にもそれから内面的にも進行していく、そういう現実をどこに見るかと言いますと、牧師の目から見ますと教会の信徒の中に見るんですね。そして信徒のクリスチャン達の中に、信仰理解においても、またその価値観においても、世俗化の波に洗われていく、そういうような現実を見させられることが多いのであります。それで、今教会現場で起こっていることということですけども、教会という一般的な、物の言い方はできません。ことごとくわたくしが奉仕してます松見が丘キリスト教会の現場で起こっていることと言ったほうが正確だろうと思いますけれども、感じていることをですね、3つのことだけちょっと思いましたので申し上げることにします。まず第一にですね、「成長神話の崩壊後と教会形成」、そんなことを少し考えています。戦後50年以上たちますこの日本の社会で、私も戦後生まれなんですが、その戦後の日本の社会の歩みと、ほぼ軌を一にする様にして、日本の教会の形成、あるいは、宣教の業がなされてきたと言う思いが非常に強くしております。何もなかった時代から、物を食べられる時代に、そしてまたより豊かな社会を目指して、そして、日本の社会が一丸となって歩んできた、そういう時代の流れが、ずっとありました。そういう中で、教会も本当に苦闘しながら、何もなかった時代から伝道し、ひとりふたり、そしてまた教会が少しずつ多くの人たちが集められてくるというようなことで、教会なりの成長と言いましょうか、そういう事が成されてきたように思います。それで私の目から見ますと、自分自身の中に見ることですけれども、この世の、この社会が持っている物の考え方、価値観、成長への思考とか、成功への願いとか、豊かさへの探求とか、そしてそのような力って言いましょうかね、自分達も本当に力をつけたいと、日本の伝道をするのには本当にこう、そのような力をつけたいというそのようなものの考え方というものが根強くあったと思います。そしてこれは世の中のものの動き方と教会の中で奉仕をしている私自身の中にもあることでして、何かそこには聖書的に物を考えたということよりもですね、率直に申し上げて、やはりそのような成長信仰、そしてまた、力への信仰と言いましょうか、そういうことが、教会の歩みの中に、また自分自身の中にも正直言ってあったなあと思います。世の中が成長神話が崩壊して行く、環境問題やさまざまな問題、そして核の問題等々で、一つの手詰まり状態の中で、その成長神話というものが良いことではないという、そのベールがはがれて価値観が崩壊して行く中で、迎えていったのがこのポストモダンの時代とも考えられなくもないと思うんですね。そういう中で、教会というものが新しく、本当にこの時代を乗り越え、そして本当に教会形成をしていく上で、何が本当に必要なのか、私はやはり苦難の神学とか、苦しみや痛みや、そういうものの持っている意味って言いましょうか、それを教会は深めなければならないんじゃないか。

病からの癒し、あるいは苦難からの解放、苦しみからの解放と言うこと、それ自体がそのまま受け入れられていた、信じられていた時代、そしてその背後にある哲学や考え方は成功であった。しかし、その中で、傷み苦しんできた者達が、社会にも、そして教会にも多くあったのではないか。私の牧会している教会の中にも、また仲間の牧師達にも色々聞きますと、心を病んでいるかたがたが教会に足を運ぶことが多くなったと。また、教会の中にいる者たちの中にも心を病み、そしてトラウマのようなものを持っているかたがたが非常に多くなった。不登校であるとか、あるいは、いじめの中で苦しんでいる子供であるとか、あるいは逆にそのようなことに荷担している現実があったりとか、その様な教会は、いわば社会の動きの中でひずみ、そして傷み歪み、そういうところで苦しんできている者達が身を寄せてくるような、役割なり、場と言うものが、求められている時代だなと思うんですね。そういう中で教会自身も教会の形成や、伝道や、そういう事が成されていくときに、力への思考、成功への思考の中で、クリスチャン達も同じように傷んできたということがあるいはしないか。もう一度この時に、私たちの



教会の形成や考えるときに、苦難の神学や苦しみの意味や、病むということの神様の前におけるその意味を本当に考えなければならなんじゃないか。ちょうど前半の講演の中でもフリフューン先生もおっしゃっいましたが、少数者としての、マイノリティとしての、そういう意味をもっと聖書の中から深く捉える必要がある。一方で多くの人に本当にイエス・キリストを信じて欲しいという願いを私は素朴に持ちます。でもどこかそこに、マジョリティ思考というものがありはしないかと。マイノリティであることが不成功であって、宣教が進んでないかのように考える発想を私たちは断ち切らなければならないんじゃないか。マイノリティであることの聖書的な意味、そのことを私たちは深く掘り下げなければならないんじゃないかと今考えさせらています。

それから第二番目のことは、クリスチャンの信仰の世俗化現象ということ。これは、クリスチャンの信仰理解が、非常に現世肯定的と言いましょうか、この世思考というのが非常に強くなってきているな、と感じるんですね。「自分探し」と言う言葉が世の中にも入りましたし、また教会に来る若者達の中にも、みずからのアイデンティティがはっきりしていない。そして、その様な危機感を覚えた者達が教会に足を運んでくる。そして自分自身のそのアイデンティティというもの、まあ消費社会であるとか受験競争の時代であるとか、競争原理の中でまた成功への思考の中で、言わば何と言いましょうか、傷み苦しみ落ちこぼれてくるような、まあカッコ付きですけれども、そういう人たちが、みずからのアイデンティティというものを本当に確立したいと。そういう思いで教会に足を運びそしてキリストの福音によってみずからのアイデンティティを確立したいという思いを持ってくるということ、そういうことが教会の伝道現場にはやっぱり多々あると思いますね。でもそれは一見非常に真剣であって求めるものですが、けれども、そのキリストの福音によって自分のアイデンティティを確立したいという発想にとどまっているときに、それができないとなれば福音から離れますね。教会から離れていきます。その判断は、その人がするんですね。だから根本にあるのは自己中心だし、自分主義だと。ミーイズムというものが、やはり信仰者の中にまた求道者の人たちの中に非常に深くあると。それ自身は、決して間違っていない様に見えながらも、そこから抜け出ない現実があるとすれば、一つの時代の波を受けているなという感じがするのですね。私の牧会の中で、一人の高校生時代から教会に足を運んで、私自身が深く関わった青年がいます。その青年は、イエス・キリストを信じました。そして十字架の福音を信じて、福音の確信を持ったかに見えました。でも、しばらく教会生活を送る中で、彼は教会から離れました。そして、教会の中にキリストの福音の中に、彼の理解するその福音ですが、そしてまたこの一介の牧師が提示する福音ですから、牧師の側の未熟さがあるわけですけれども、彼はキリストの福音の中に自分自身のアイデンティティを確立するものを見い出さなかったと結論づけるんですね。そして彼は自分探しでどこに行くかというと、アフリカに行きます。彼は音楽をやります。そしてドラムをたたく男なんですけれども、バイトして苦労して苦労してバイトして、そして金をためてアフリカに行く。そしてアフリカの奥地に一人で旅行しながら、仲間を得て旅行をしながら、そして帰ってきました。何年か前に。そして私の所に来ました。「先生、僕は音楽こそすべての文化や人々の中に普遍的に共有できる、そういう力、(彼の言葉を使うと) 福音があると思う。」と言ったんですよね。こういう事を言われたちゃった牧師はどうしたら良いんだろうかと。まあ、明日から牧師を止めなきゃならんだろうという風な感じがしますね。そういうキリストの福音というものと、それから自己のアイデンティティというものを求めようと。でもそれがやはり信仰の世俗化傾向のように私には思えるのは、その自己の確立のための信仰、福音、という捉え方から、抜け出ることができないことが一つあるなと思いますね。それからもうひとつはですね、クリスチャンの若者達の伝道への戸惑いといいましょうか。自分はイエス様を信じて救われている。そして自分はクリスチャンだと。でも自分の友達に、この私が自分が信じて確信を持っている様なそうい

うものとして、友達にもこれは真理として提示して良いのか、それを伝えて良いのか。それが少しいやでもそれを伝えていくということをして良いのか。それは相手の人格を脅かすことではないか。そういう戸惑い。まあ言ってみれば伝道したくないことの理由だろうとしか考えられない面もあるのですけれども、でも、若者達の中にある信仰というものの相対的な感性と言いましょうかね。自分はO・K、でもこの人にはという様な、戸惑いを考えなければならない。それから信仰の、要するにクリスチャン生活の中での問題から言えば性の問題がやっぱりありますね。恋愛至上主義的なそういう物の考え方の中で、何の疑いもなしにそう思う。そして、性の問題がクリスチャンの中に蔓延して行く。離婚も教会の中に起こりつつある。あるいは、教会の中で、結婚して家庭を持つことに対する女性達の失望観。そういうことに対して、教会の牧会はやはり正面からぶつかっていかなければならないと思っています。信仰の世俗化現象というものを、私は見る思いがするんです。

それから、最後に教会の中で今霊性が注目される背景、このスピリチュアリティという言葉が、随分もてはやされてきています。そしてまた、この霊性という言葉はポストモダニズムの中に出てくる言葉でもあるわけですよね。そして、時間がありませんからふたつのことだけ申し上げたいと思っています。一つはこの霊性、教会で取り上げられる霊性ということが、自己のアイデンティティが確立していない、あるいは未成熟な中でそういうこととぶつかってくるひとつの信仰的な壁、それを突破しようとする問題意識の中で、この霊性という問題が取り上げられているなと思います。でもこれが、個人的・内面的なレベルで霊性の探求や追求というものが起こってしまえば、これはやはり聖書的な霊性の追求にはならないだろうと言う風に思いますね。それからもう一つはちょっと別な角度からですけれども、本当に聖書が言わんとする霊性とは一体何かということ、聖霊のお働き、きよさの問題、聖化の問題と言うこととともちろん深く関わるんですけれども。でも、もう一つ別の角度から思わされることは、クリスチャンである者たちが、また、教会自身の歩みの中で、霊的な資質として自らに対する批判能力と言いましょうかね、自分自身の中に本当に間違いを見出し、また自分を堀り下げ、そしてそれを批判し、自らが、神様の前に本当に変えられていくと言いましょうか。悔い改めによる確信と言いましょうかね。変革ということにもなりますが、そういう霊性の問題と、その実行批判能力と言いましょうか。そして霊性の問題が扱われるときに、そのことに対する変革への力というものを教会は取り上げようとしているだろうかと。一つちょっとご紹介しようと思っているのは、竹内芳郎という方がいらっしやって、そしてこのかたが『ポストモダンと天皇教の現在』という本を書いていらっしゃるのですが、この中で、現代のポストモダニズムを、日本におけるポストモダニズムの稲垣先生がおっしゃいましたけれども、伝統的な日本の宗教や精神と、本当に軌を一にしていくわけですよね。そしてポストモダニズムが、もてはやされていく日本のコンテキストと言うのは、非常に保守的ですね。あるいは保守反動と言っても良いかもしれません。でもそういう中で、日本の歴史や、日本という国を全面肯定していく、そういう方向になってしまうんだと。これはおかしいと、そうではないだろうと。そして本当に日本のそのポストモダニズムの状況というのは、日本を自己批判し、みずからの非を認めていく、そのような力こそがなければ、本当の意味で普遍的な真理に到達しえず、また普遍的な地平を開くことはできない。この教会の中で取り上げられている霊性の問題が、そのような視点を持って扱われようとしているかどうか、私の非常に大きな個人的関心事であります。

以上です。

稲垣：はい、ありがとうございました。そうですねまず、一つ、二つパネラーの中で質疑応答して、そして、フロアーの皆さんの方からのご意見を伺いたいと思います。私は一番最初に発題したので、お二人のお話を聞いて、またそれなりにちょっと思ったことですけれども、特に松元先生が今おっしゃったことの中に、若者に広がるミーイズムと、そして最後に自己批判能力の無さと、この二つのことが非常に私にも印象に残るし大変共鳴できる所です。若者が自分探しをする、そのために教会に足を運び、キリストにあるアイデンティティを追求するが、しかしそれが得られないときは、簡単に教会を去ってて

しまうと。じゃあ何の為に福音を求め求道するのかっていうとそれは、自分を中心に自分の欲求を満たす、という事のためにのみ福音が捉えられているんじゃないか、それゆえに、ミーイズムだと、こういうことですね。私は先ほどちょっと申し上げた、若者の中の特に、ニヒリズム、宗教的ニヒリズム、カルト集団ということですけれども、オウムに関するものを私はかなり読んで来たんですが、その中にまさにその事が出てくるんですね。いわば修行をして超能力を得たい、というそういう欲求ですよね。それを修行の中で実際満たしていく。そのうちそれが得られそうになったあるところでいわば教祖である麻原という人に全部の自己を預けてしまうそういう状況が起こって、そして結局は自己確立というものがそこで成されないで、何の事は無い、その教祖のロボットになっていってしまう。ですから、サリンをまけっていうと、「はいまきます。」という風な事になってしまう。そこに出てくる若者の宗教的渇望、ある意味の霊性なんですけれども、それがものすごく自分を確立して、自分としてその欲求を最大限に満たしたスーパーマンみたいな、超人間的なものになりたい、そこからスタートしているんですね。それと、福音が提示する自己確立のやり方っていうのは全く逆だろうと。さっきフリフューン先生が、自己犠牲という事を言われたんですけれども、その自分が、キリストによって捉えられて、そして「一粒の麦落ちて死なずば実を結ばじ」という自分をキリストに献げていく中に、隣人を愛してそこに福音が伝わりそして自分もそこに確立されてくるというキリスト者の共同体形成と、ちょうど逆の事が起こってると思うんですけれども、その事について、先生どういう風にお考えでしょうか。

松元：あの、えーと今、先生がおっしゃったことを私も本当に思っているんですね。そしてそれを教会の牧師としてですね、たとえば、自分というものを確立したくて教会に来ようとする、そういう若者達、その動機がおかしいという風にはもちろんいえないし、別に仕方の無い事です。でも本当は、そのようにして求める人が、自分中心の信仰と言うものから、キリスト中心の信仰理解を、教会なりあるいは牧師なり牧会者なりが、そのようにして導く事が出来ないと、教会を離れて行くんですね。それから教会内のきよさという問題があると思いますね。

稲垣：はい、ありがとうございました。何か湊先生お付け加えになるところございますか。

湊：今若者の問題が取り扱われておりますけれども、私は、現代の若者は、という主語で物を話すのを嫌います。なるべく避けます。なぜならば、現代の若者をつくっていったのは、私達、親なんですね。非常に大きな責任を感じています。ですから自分の子供達を育てるにしても、今の若者は、という総称でものを討論する事は私は出来るだけ避けようとしているんです。結局IQで計り、そしてEQで計ってきた、すなわち、まさにインテレクチュアル・クオリティと、知的能力で差別してきた教育とそれじゃいけないから、EQ、エモーショナルなクオリティが必要であるということ、私にとっては、やはり今こそ女性の出番とトゥルニエが言っていることは、これは西欧、日本を問わず、アジアを問わずやはりここにＬＱといいましょうか、愛LOVE、ですね。それは普通のLOVEではなくてまさに聖書がいう主に愛されて初めて愛する事が出来るところの愛、これが、教会にみなぎらない限り、私はこれは、今の現代社会のいわゆるポストモダニズムとイわれているこの問題も解決していかない、自己のアイデンティティ、アィデンティティと言っても、解決していかないだ

ろうと、こういう風に思います。これは、私が女性ですから、女性の立場から声を大きくして、やはりトゥルニエが「今こそ女性の出番」と言ってくれた、ただそれは解放論ではなくて本当に今のこの混迷に共に生きて、男性と女性が共に生きてこれを支え、これを満たし、そして宣教の業に邁進できるところの環境づくりと言いましょうかね、教会における環境、社会における環境、これを作っていかなければならないんじゃないかと、思って伺っておりました。

稲垣：はい、ありがとうございました。それではここでマイクをですね、フロアーの方にむけて、そしていくつかのご質問、そして又討論が出来たらと思いますけれども、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

質問者：湊先生の言う「自己確立の人格論」や稲垣先生の言う「自立した人格的な個」という発想は、近代主義やデカルト的な個人主義になってしまうことではないでしょうか。

湊：私は、人格としての人間形成という言葉で書きました。この人格という言葉は、キリスト教のいわゆる縦軸があってはじめて確立されることばです。新渡戸稲造先生は、初めてパーソナリティと言う言葉をここに使われました。すなわちいわゆるデカルトにせよ、西洋近代文明の中につくられてきた、この自我ではなくてキリスト教との関係における人間形成というのは日本にとっては初めての概念形成です。ですからこれをどう表現したら良いか。新渡戸先生は大変苦労なさいまして、パーソナリティという言葉を使われたのです。パーソナリティという言葉は「性格」という言葉に訳されてしまいますから、なかなか理解されない。それでも、パーソナリティの無いところには、レスポンシビリティが無いと、新波戸先生はおっしゃいました。矢内原先生がそのあと新渡戸先生がおっしゃられるところのパーソナリティは、まさに垂直的な関係における、パーソナリティであっていわゆる自我ではないと、いうふうに、そこにキリスト教的人間教育の、出発点がある。新渡戸先生は又このようにおっしゃいました。〔to know〕〔to do〕〔to be〕知る事だけでは十分ではない。又それを実行するだけでも十分じゃない。〔to be〕そこにあることによって本当にそこに自己確立が出来るんだ。to beとは、神との関係におけるまさに、福音における to beである。でこの事をどう表現したらよいか、人格としての人間形成、これが私がやっと到達した表現体系でした。これをハーバードにおりましたときに日本における女性論について語ってくれと言われまして、それを英語で講演しました。英語で講演をしましたときに、人格としての人間形成は、英語にならない事を発見しました。independence これもだめです。identity, self identity, 私が言おうとしている神との関係に形成されたところの人格における人間形成が、明治以降にどれだけ大きな役割を文化に果たしてきたかという事を話したいんですが、語れないんです。self esteem, それから、self safficiency, いろんな言葉を教えられるんですが、どうしてもそこに行きつかない。ここを日本の私達はまさに人格としての人間形成を聖書において、福音においてなさない限り、これは西欧における合理主義の中から抜け出す事が出来ない、と私はこういう風に考えております。

稲垣：それじゃ、そうですね、今のご質問に対してひとつ確認させていただきたいんですけれども、たとえば、人格的な個の確立と言う言葉を私は使いました。そしてその人格的な個の確立、その個と言う考え方を出してくるのは、デカルト的な合理主義の枠内に納まってしまうんじゃないかと、こういうご質問でしょうかね。

それに対して私はこう答えたいと思います。デカルトはポストモダンの哲学から批判の矢面に立たされている、かわいそうな人物ですけれども、少しデカルトの弁護もしたいと思います。中世から近代にいたる中でいわば人間っていうものをどう捉えるかという捉え方が、ものすごく大きく変わったと思います。ご存知のようにルネッサンスとか、宗教改革、そして17世紀にはデカルトの哲学が出てくるんですけれども、その中で出てきた事は、ある意味では人間の尊厳というものをいかにして神様の前に回復していくか、という命題だったと思います。つまり近代社会って言うのは、両面を持っている思うんですね。ある意味では人間がそれまで人間として扱われていなかった時代から、ようやく人間が尊厳をもった存在である人間として認められる。西洋の例でいうと遠い文化の事でわかりにくいから我々の日本の文化のこと考えてみましょう。近代以前というとたとえば江戸時代にしましょうか。江戸時代、どうで

すか、皆さん生まれた場合に、天皇・皇族・士農工商・非人等なんていう身分制がですね、カーストがあった。要するに身分制度の中で人間はがんじがらめになっていて、ひとりひとりがいわば人間として平等に扱われるっていう事は無い社会なんですよね。それが、近代以前社会、西洋でもちょっとコンテクストは違うわけですけれども、キリスト教がありましたからコンテクストは違うんですけれども、良く言われるように、近代になって初めて個、あえて私は個の自立と言う言葉を使わせて頂くんですけれども、人間が人間として、神の像に作られたわたし、あなたが平等にですね、扱われるそういう社会が多くの血を流しながら確立されてきた。こういう面がやっぱり近代にはあると私は思っています。それはある意味では、近代の肯定的な部分として私は評価します。ですからそれは私自身の理解では、べつに合理主義と直接には関係無い現象なんですが、でもデカルトや啓蒙主義はこの人間の平等性に一役買ったことは事実ですね。でも、神様の前における平等性、人間の尊厳の確立という事は、これはもういうまでも無く我々のコンテクストでいえばマルチン・ルターが「われ一人ここに立つ」という言葉を放ったときにそこに神様の前における自由と言うものを確立した。デカルト以前ですよね。既に個と言うものがそこにハッキリと声をあげることが出来た。それまでは、救いというものは、もうカトリック教会のヒエラルキーの階層性の中に、組み込まれて、ひとりひとりが信仰によってのみ救われる、信仰義認という事は無かったわけですから。そういう事をいえばですね、私達のキリスト者のルーツとしてデカルトじゃなくてルター、そして更には、カルヴァンとかですね、そういう福音による神の前における人間のアイデンティティの確立、と言うものの系譜の中における個、という風にね、私はお答えとして返したいと思います。ですから神から切り離された個というものは、私は、存在しないと思います。カルヴァンが神を知る事とそして自分を知る事は、互いに絡み合ったことだと、有名な綱要の最初のところに書きましたけれども、自分を確立する、それはそれだけ深く神を知る事の故に確立できるのであり、逆に神を深く知っていく、そして神の教えたもうた隣人を愛せよと言う事を深く実践していくところにまた私自身も確立されてくると、そういう相互の関係にあると思うのです。デカルト的な意味での合理的に閉じてしまった自我、神にも頼らない、人にも頼らない「我思うゆえに我だけがある。」こういう自我ではないという事なんですね。

えーと、よろしいでしょうか、松元先生何か一言ございますか。

松元：今の稲垣先生のお話を聞きながら思いました。デカルトの個とは神様との関係が切れた、世俗化の中での若者が最初に教会によったアプローチというのは、神様との関係の中での自我というもの、あるいは自己というものを回復させたいというところに自分から発信したアプローチなんでしょうけれども、神様にあっての自分と言うものを捉えなおして行く、発見していくとね。そういうプロセスというものが、教会に足を運んでくる青年たちが神様抜きの世俗の社会で自分を発見できない、そしてそのレベルから抜けきれないままだといけない。十字架に自我をかけようとし、自分が死ぬわけですが、そしてパウロが言っているように、キリストと共に古い自我が死ぬわけですね。こういったアプローチの仕方を考えていかないと、一時はよくても、後に衰退していってしまう。

稲垣：はい、ありがとうございました。大変議論が白熱して面白くなってきたところなんですけれども、そして又すごく、大事で、又深まってきたと私は、理解していますけれども、残念ながら、ここで時間が無くなってしまいましたので、質問を受けたいのですが、申し訳ございません。これで閉じさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

—完—

＊「共立研究」は年3回発行、定期購読料は年間500円（郵送料含）です。購読ご希望の方は、研究所までご連絡下さい。

共立基督教研究所
「共立研究」
発行人　稲垣久和
編集人　渡邉彰子